



## 経験の豊かさが成長の糧になる！

校長 石踊 晴元

早いもので12月の足音が聞こえてきました。寒い冬を迎える時期ですが、まだまだ熱は冷めません！原因は、サッカーのワールドカップカタール大会にあります。

11月23日夜、日本はドイツとの試合で金星を挙げ歓喜に沸き、興奮のあまり翌日は睡眠不足だった方がおられたことでしょう。そして、期待していた27日のコスタリカ戦では惜敗し、悔しさのあまり脱力感に陥った方もおられたことでしょう。

私たちは結果だけを見がちですが、大切なのは「本番までの過程」と「体験を通して経験を積むこと」ではないでしょうか。森保監督は本年度のW杯を見据え、対策を明確にした上で選手を招聘し、コーチングスタッフ等と戦略を練り、練習に取り組み、当日の試合に臨まれたと思います。本番までの豊富な練習量と洗練された多様な練習内容の経験から「ドーハの悲劇をドーハの歓喜にかえる」の言葉に、日本チームの自信と想いが表れていると考えられます。

「本番までの過程」と「体験を通して経験を積むこと」は、教育現場にも共通して言えることです。本校でも「努力の大切さ」「体験活動」を重視し、教育活動に取り組んできました。「認知症フレンドパートナーシップ養成講座」では、劇団「南の星座」による劇を通して、認知症の方への接し方等を学びました。また、若年性認知症と診断された丹野さんの講演会に参加し、周囲の人がサポートすれば認知症の人も安心して生活できることを学びました。

「わくわくふれあいフェスティバル」では、日頃の練習の成果を元気に、堂々と発表することができました。

「体育センターがやってきた」では、県総合体育センターからお二人の講師をお招きし、「ラダーゲッター」「ディスクゲッター」「バグゴ」「ボッチャ」「キャッチング・ザ・スティック」のニュースポーツゲームを楽しむことができました。

「いのちの授業」では、癌を患った野田さんを迎え講話を聴きました。思った以上に癌は怖くないことに気付き、周囲のサポートがあれば安心であること等を学びました。

これらの体験活動が体験として終わるのではなく、経験を重ね、知識や技術の蓄積につなげてほしいと願っています。子供たちが困難な壁に遭遇しても、ドラえもんの四次元ポケットから最適な道具を取り出すように、これまでの経験から、困難な壁を乗り越えられる知識や技術をアレンジして活用する「生きる力」を身に付けてもらいたいです。



## 収穫したいもを青山荘に贈呈！

今年度は基腐病の被害もなく、さつまいもをたくさん収穫することができました。コガネセンガンは澱粉用に販売しました。食用の「紅はるか」「安納いも」「福むらさき」は、わくわくふれあいフェスティバルで販売しましたが、完売までには至りませんでした。そこで、5・6年生は、1学期に福祉の学習でお世話になった山添さんが勤務する「特別養護老人ホーム青山荘」にさつまいもを贈り、感謝の気持ちを伝えることにしました。

本来ならば、利用者の方との交流活動を予定していましたが、コロナ禍の影響により実施できなかったからです。この話を山添さんに相談したところ、快諾していただき、170個の紅はるかを11月18日に贈呈しました。青山荘からは、利用者の方が手作りした折り紙飾りをいただきました。この交流を機に、今後は利用者の方との交流活動が実現できたらと期待しているところです。

